

# 研究紀要

第 1 号

1992

財団法人 栃木県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

## 序

財団法人 栃木県文化振興事業団は多様化する文化需要に効果的に対応するため、栃木県と一体となって県民文化の振興に関する事業、文化施設の管理運営に関する事業、埋蔵文化財の保護及び調査研究に関する事業などをを行うことを目的として昭和56年4月に設立されました。

当初11名でスタートした文化財調査部は、平成3年度に「埋蔵文化財センター」の設置に伴い宇都宮市から国分寺町に移転するとともに、2部6課制、56名の職員によって構成される組織に改編し、施設の拡充・体制の整備に努めてきたところであります。

文化振興事業団設立10周年を迎える本年度は、節目の年として各種の記念事業を実施したところ、多くの県民の参加を得ることができました。これも関係各位の埋蔵文化財に対する御理解のたまものと深く感謝申し上げるところであります。

さらに、今般、埋蔵文化財の普及・啓発と職員の研鑽などを目的として「研究紀要」を刊行することといたしました。本事業団では今後とも、こうした事業の充実に努めるとともに埋蔵文化財保護の推進に適切に対応して行く考えでありますので、関係各位の一層の御指導と御協力をお願いする次第であります。

最後に、本書の刊行にあたり、種々御協力くださった方々に、深く感謝申し上げます。

平成4年3月

財団法人 栃木県文化振興事業団

理事長 小菅 充

## 目 次

北・東関東の括籠期・加曾利E I式土器	海老原郁雄	1
宇都宮市花の木町遺跡出土十十器の再検討 —栃木県における古墳時代前中期の十器様相— 後藤 信祐 27		
栃木県塩谷郡氏家町四斗苅遺跡について	安永 真一	55
大形前方後円墳の築造企画（1） —栃木県国分寺町山王塚古墳の復元をめぐって— 小森 紀男・齋藤 恒夫 85		
足利市櫛神山古墳群の形成過程について	斎藤 弘・中村 享史	107
古墳時代後期の朝鮮半島系青	内山 敏行	143
古代東国における墳墓の展開とその背景	仲山 英樹	167
所謂中世遺跡出土の鳥帽子について —鳥帽子雑考— 田口 耕一 275		
わが国近世以降における石灰焼成窯の技術史的研究 —野州・八王子・美濃石灰の事例を通して— 熊倉 一見 295		

# 北・東関東の搖籃期・加曾利E I式土器

海老原 郁雄

1. 型式交替の画期
2. 「三原田式」の周辺
3. 「中峠式」との地域交流
4. 「搖籃期」の地域的組成
5. 〈亜関東圏〉南縁の様相
6. 大木園の『遠交近攻』

おわりに・参考文献

## 1. 型式交替の画期

縄文中期の中葉、北関東に大木8a式土器が伝播した時、既存型式の阿玉台式から新型式の加曾利E I式へ土器づくりの交替劇が急速に進展した。北関東ではこの外來土器と既存土器との替り共存を経て、新たな加曾利E I式の成立を見るがそれらは地域個性の強い土器群であった。この一連の進展を大木8a式の伝播、上着、地域土器への消化・新立とするプロセスに分けると、前者を大木8a式の古段階、中・後者を新段階にあてることができる。それは関東編年では加曾利E I式古にあたるわけだが、地域土器が確立する画期に視点をおいて伝播・上着を前半段階、消化・新立を後半段階に区分して論を進めることにしたい。

大木8a式の強烈な影響力にいち早く席巻されたのは、大木園の南縁にあたる福島南部とその一衣帯水の地、栃木・茨城の北部である。これらの地域は関東圏と東北圏の狭間にあって、その時々に両圏の縄文文化が触れ合い、せめぎ合うひとまとまりの地域で、これを「亜関東圏」と仮称する。

縄文中期の中葉、「亜関東圏」は「準大木園」の様相を呈し地域色豊かな土器群を生起させる。それらは新来の大木8a式、既存の阿玉台式との替り併存の間に、湯坂タイプや諫訪タイプなどの「合の子土器」のいくつかを含む多様な組成をもっている。大木8a式の渗透力は「亜関東圏」に隣接する北関東西奥の群馬西南部や茨城南部から千葉北部に及び東関東などの彼方の地へ達し、それぞれの地の〈上器つくり替え〉を促進した。

しかし、各地における影響力の蒙り方は一様ではなく、土地柄を反映した局所的で個性豊かな顔つきの土器群を簇生成させた。そのような大木の伝播当初にあっては、中味は異なっていても新来の大木8a式、既存の阿玉台式や勝坂式が併存し、それらの「合の子土器」の姿をした地域的な顔つきの土器がセットをなすのである。群馬の山間域に出現した「二原田式」、千葉北

部を中心に盛行する「中井式」は、そうした地域個性が強く表出された土器群であった。大木 8 a 式の渗透は、地域的な土器群を生起させたが、やがてその影響圏の中で地域相互の交流をひき起し、互恵的な文様要素の交換が進捗する。関東地方を縦取る北・東関東域に加曾利 E I 式が成立していく、摺籠期は、そうした新鮮さと活力にみちた時代であった。いま、それらの地のいくつかの遺跡の土器群に基き、〈摺籠期・加曾利 E I 式〉の様相について若干の見解を述べることにする。

人木 8 a 式が渗透した関東周縁の地域に簇生した土器群にあって、広域的に用いられる顔面把手のモチーフは、それらの同時性を跡づけると共に、この地域の連帶的な交流を示すものとして注意される。この把手は、眼だけを強調し、口縁内側につく簡略なものが通例であるが、眼鏡様の眼、棒突起で鼻、三角突起で口を表出した外向きの顔（湯坂遺跡 深鉢把手）もあり、一様でない。それらは人面らしいが、大きな眼だけが強調される特徴をもち、獸面などの可能性もある。第 1 図 1 は茨城県鹿島町・鍛冶台遺跡の土壙出土の顔面把手で、人木 8 a 式、阿玉台式末葉の十器、湯坂タイプの土器と共に伴したもの。第 1 図 2 は宇都宮市・竹下遺跡の土壙（後述）出土の顔面把手で、

前者と同じ組成の土器群に作出したものである。1 は、波状口縁の頂部につけた板状の把手で、表側は結節沈線でハート状の 2 区画を描き、中央に貫孔がある。裏面は顔の表出。横長のハート形に棒状の貼紐区画をして顔の輪郭をあらわし、中央の区画線が鼻、その両側に貫孔が眼。人面にもミズクにも見える。内向きの顔である。器面全体と隆線上とに縄文を施した阿玉台式末期の土器。頸部にコの字沈線が廻る。2 は波状口縁の頂部に突起様に顔面を表出。表側は貼付文が剥落、その下位に断面二角の隆線による渦文、裏面は棒状に円文を二つ並べて眼をあらわす。阿玉台式末期の土器。この類の顔面把手のうち、2 の類例は〈東関東窓〉の大木 8 a 式当初に特徴的に盛行する。文様構成上で特別の意味をもってこの顔面把手を加飾するのであろう。こ



第 1 図 中期中葉の顔面把手 (1/5)

ミズクにも見える。内向きの顔である。器面全体と隆線上とに縄文を施した阿玉台式末期の土器。頸部にコの字沈線が廻る。2 は波状口縁の頂部に突起様に顔面を表出。表側は貼付文が剥落、その下位に断面二角の隆線による渦文、裏面は棒状に円文を二つ並べて眼をあらわす。阿玉台式末期の土器。この類の顔面把手のうち、2 の類例は〈東関東窓〉の大木 8 a 式当初に特徴的に盛行する。文様構成上で特別の意味をもってこの顔面把手を加飾するのであろう。こ

の類の顔面モチーフは阿卡台式には本来なかったもので、人木 8 a 式の渗透と共に出現している。量的には福島中通り地方の石川町・七郎内 C 遺跡で多く出土しており、奥会津の館岩村・松戸ヶ原遺跡でも報告例があり、いずれも湯坂タイプの土器に付けている。大きく眼だけを表出した物語性の文様にどんな共通意志が働いたのか、湯坂タイプの出現と共に北関東から東関東へ瞬くうちに広まったのは、人木 8 a 式受容の社会的な変革上に不可欠な要素であったからだろうか。

〈亜関東圏〉に受容された大木 8 a 式は、二つに分岐して関東の周縁地域へ広まる。一つは南下して東関東へ、他は西へ延びて群馬南半の平野部へ。S 字文や顔面モチーフは新来の大木流儀のシンボルマークともいえ、その渗透の速さ、広さを端的に示している。それが及んだ地域の中期土器の変革について発掘資料を基にみることにする。

## 2. 「三原田式」の周辺

「三原田式」の最も特徴的な土器が愛称カッパ。口頬に廻る透し彫りの様な中空突帯が口吻を突き出したカッパの顔に似ており、無文の直立した口縁を頭の皿に見たるとまさにカッパで、軽妙な命名である。この突帯は、S 字文や渦巻文を立体的に表出したものだが、口縁把手ではなく、口頬に鰐をつけた様な彫刻的な突帯が一廻りするところが独特である。

一原田遺跡（群馬県赤城村）の発掘調査は1972. 11~74. 2 の間に実施され、2.1haの調査区域から大量の縄文遺構・遺物が発見された。それらは黒浜期から堀の内期に至る住居址341・ピット約4,000、遺物3,391箱を数えるといい、中でも650個体に及ぶ復元個体（群馬県博）は、中期を主体にこの地の華やかな土器の変遷があったことを物語っている。調査者の赤山容造（現群馬県博）は以降の整理・研究を通じて記録・遺物を公表し、研究者たちの意見も聞きながら報告書作成の作業を進め、ユニークな住居址編年観を打ち出した第1巻（1980. 赤山）、中期前・中葉の遺物をまとめた第2巻（1990. 赤山）を公刊した。これによりカッパ、すなわち「三原田式」は正式に編年的位置づけされた。カッパにはそれ以外の土器も併出している。縄文土器のワンセットはいくつかの系譜から組成されているのが常である。カッパもまた、それ自体が際立って印象的で主体的な土器であると共に、他の異系土器と共存する。その点では、カッパは三原田タイプであって、時空を限る一型式=三原田式は組成全体の呼称でなければならない、と考える。その意味で、ここでは「三原田式」と表記することにした。その「三原田式」を周辺の土器との関連も含めてどう理解すればよいのか、若干の私見を述べてみたい。

赤山は前出の報告書で、「三原田式について」としてその概要を述べている。その骨子は、「三原田式は、焼町土器と勝坂 3 式の直系の子孫として群馬県中期土器の時間的編年の中に定位を占め、群馬県の山間部に近い地域を中心として局地的に展開する。その成立には大木 8

a式の影響に与るところが大きい」というものである。編年の中の定位位置とは、群馬流呼称の加曾利E I式の大件の中で、中峠式など多数型式が構成されていく時期に当たり、勝坂式文化期の最終末の姿を示す、という。「三原田式」は住居型式を基準にして設定されたユニークな土器群であり、「他の土器型式で置き換えることができない一定の時間幅を占める」とされる。つまり、群馬県山間部寄りの一帯では、加曾利E I式に代わって「三原田式」が存続することになる。それは、「中峠式」が東関東域でいくつかのタイプを組成として時間的連続をもつと同様に、群馬の北西地域を中心として展開する「型式」なのである。然らば「三原田式」はその時間的連続において新旧の段階変遷を経るはずであり、組成内容に変化を生じることが予測される。これについて、「三原田式」の周辺地域との関連で上器組成の在り方を一原田遺跡をはじめいくつかの既存資料に基いて分析してみる。

第2図1~7は三原田遺跡の発掘資料で、1~5は住居址、6・7は上場の共伴土器。両者ともカッパを中心とする「三原田式」の組成である。前者は「三原田式と勝坂3式の共伴例」(前出報告書、以下同じ)とされるセット。これに焼町土器と大木8a式的な土器が伴っている。1・2はカッパ。1は典型的なカッパで、中空突帯の上半と下半に8単位の円孔を交差配列し、余白に縱短沈線を刻する。突帯は下膨れで、下半の円文の間に下半の梢円文が入る形となるので恰も口吻を突き出した河童の顔に見える。胴部は繩文地文をつけ、複線の弧文を魚鱗様に描く。この弧文は大木8a式の胴部装飾と類似するもので、カッパの“合の子土器”的な側面を示すと考える。3は「大木8a式に近い。しかし、器形と文様構成は三原田式」とされる。背側りの結節沈線を伴うS字文連鎖の深鉢で、大木8a式の渗透当初の北・東関東に広まった土器である。S字文連鎖が阿玉台式ではなく、「三原田式」に取り込まれたということか。4は勝坂式的な土器で、一個体上に勝坂3式と三原田式の特徴が明瞭に共存している」という。胴部文様の上半に弧文を連鎖し、下半に三角区画文の横帯文を配する。弧文はカッパの胴部文様にも共通する大木的な文様で、三角区画文は勝坂式の代表的な文様。勝坂式に大木的な要素を加えた折衷的な土器である。5はカッパと同じ器形で、口縁文様は4単位の渦巻文を核に梢円文の突帯が廻る「中空飾り」。器形と突帯の特徴から「三原田式」とされる。渦巻文を4単位に連鎖する土器は、北・東関東地域で大木8a式の確実期を通じて盛行しており、5も同じ系譜の土器と思われる。「三原田式」の組成に大木8a式が深く関与していることを示している。他に、「一原田式」とされる破片資料にあるカッパ(本文・土器番号1250)には、横帶文に2本の交互刺突沈線が配されており、「中峠式」的な要素が認められる。

これらにより、このセットはカッパに既存の勝坂式や焼町土器がまだ伴う段階に位置づけされ、それが大木8a式の受容当初であったことが分る。そして、これらは、大木8a式の要素を取り込んだ地域色の濃い“合の子土器”であった。この組成に「中峠式」はないが、その文



第2図 三原田遺跡の中期土器

様要素のひとつ交互刺突の沈線が見られることは、「三原田式」と「中峰式」とが同時期に存在し、局地的に存続する前者へ広域的な影響力をもつ後者が係わりをもっていたことを示している。その係わり方は、「中峰式」自体の働きかけというよりは大木8a式の関係の仕方という大枠で理解すべきであろう。また、このセットの時期的位置づけから、「三原田式」の中で、円文モチーフのカッパが初現的な土器の一つであることも示される。焼町土器あるところにカッパはあるが、「中峰式」が広域化する東関東圏にカッパはない。しかし、局地的な「三原田式」圏に「中峰式」は入り込んでいく。「一原山式」組成に「中峰式」の一部が取り込まれ、いわば組成の多様化が進んだ段階をより遅い時期としてとらえた場合、「一原山式」の新旧区分ができるのではないか。

次に、周辺地域の土器との関連に注意しながらその区分を試みたい。

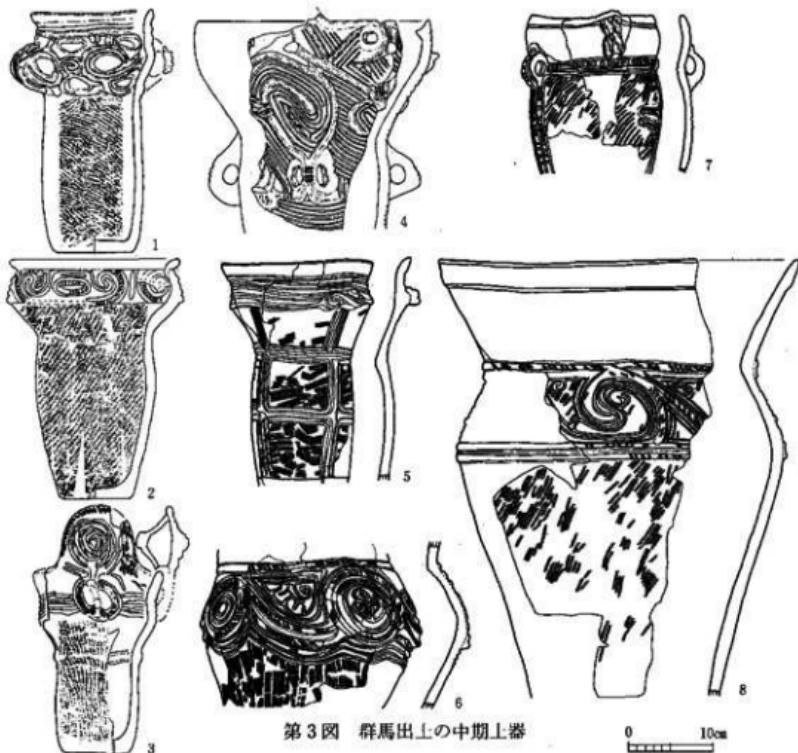
第2図-6・7は上巻の共伴資料。二個体とも「三原田式」とされる。6は、口縁が外反する深鉢で、口頸の張り出しがない。口縁に半截竹竹の横線文を併列、くびれ部にS字文の中空穴帯を廻らす。胴部は地文をつけ4単位の懸垂文を配する。貫孔のある中空穴帯を口頸に廻らす点はカッパと同様であるが、S字文穴帯は人木8a式に由来するものであり、カッパの円文穴帯とは「まったく別物」とされる。人木流儀の深化・定着した段階でのモチーフとみて、人木8a式の新しい時期に位置づけたい。口縁の横線文加飾もカッパ以降多出する文様で、口頸を限る鉄状の降線をもつ「中峰式」的な土器に特に多用されている。この横線文併列は交差刺突ないし“コの字”連鎖の加飾を伴う点で「中峰式」との係わりが考えられる。7はキャリパー状深鉢で、口頸上半に文様を集約。「中峰式」の一タイプである。貫孔把手と山螺のような渦巻突起を4単位に対置し、横線文中の列には交互刺突の沈線を配する。この横線文併列は前述の「三原田式」流儀の加飾だが、山螺のような突起や交互刺突の沈線は東関東圏の文様を取り入れたもので、やはり“合の子土器”である。

「三原田式」本来の在り方は、勝坂式や焼町土器など既存土器を主たる組成として局地的に盛行する。在地的な個性が強い土器として継続したわけである。しかし、「三原田式」の出現もまた、大木8a式の滲透を契機として諸米されたため、東関東圏の文様要素は取り込まれることになるし、それが時間経過と共に交流・広域化が進むことにより「中峰式」をも組成に加えることになったものと思われる。山螺のような渦巻突起は、茨城南半の加曾利1式古の後半段階で普遍化するモチーフで、鹿島町塩釜遺跡や板木の高根沢町上ノ原遺跡の土壤からも出土している。このように見ると、6の中空穴帯は「三原田式」流儀であっても本来のではないし、7は「中峰式」的であり、東関東とのより新しい段階での交流によった土器だといえる。この視点から6・7を「三原田式」の新段階に当てたいと考える。

「一原山式」の新旧区分を隣接遺跡の出土資料に求めてみる。

第3図1～4は富士見村・向吹張遺跡の住居址共伴の土器、5～8は渋川市・行幸山山遺跡の住居址共伴の上器を抜き出したものである。

向吹張資料は焼町上器を含む9個体の他に、大木8a式、阿玉台式などの破片が伴出するようである。1はカッパ。口頸にS字文を連鎖する中空突帯に4単位の渦巻文を配する。2は「中嶋式」の一タイプで、横円文・渦巻文を隆線と沈線とで彫刻的に表出。隆線の背に刻み目を施すなど勝坂式的な土器である。3は半円形の板状把手をもつ深鉢で、阿玉台式の系譜。把手表面に沈線渦巻を描き、裏面に中空の円文突帯がつく。このタイプの土器は、宇都宮市・御城田遺跡のSK662で「中嶋式」の加飾を取り込んで表出されるなど、大木8a式の発達当初に組成化されている。4は焼町上器。勝坂式と共にカッパ出現の段階まで遺存することが発掘例で確かめられている。このセットは、カッパに伴う「三原田式」の組成に「中嶋式」や焼町上



1～4、向吹張遺跡J8A・B号住居 5～8、行幸山山遺跡B区1号住居

器、阿玉台式が含まれており、総じて古い段階に位置づけされる。「中峠式」が個体として取り込まれている点は遺跡の個性か地域差か分からぬが、「一原田式」当初の段階で「中峠式」と係わりをもつことは注意される。

行幸田資料は「一原田式」の組成に大木 8 a 式が強く係わりをもち、其系の曾利 I 式が加わるセットである。渋川は前出の富士見と共に赤城山麓の周縁地域にあたり、群馬南東の平野部と接する場所にある。大木 8 a 式の影響圏としては北関東の西奥で、“隼人木”圏ともいえる柄木・茨城の北部地域から見れば隔たりのある位置である。5 は「三原田式」で、独特のプロポーションと口頬の「く」字屈折が特徴的。口頬文様は複列の横線文と対置した S 字文突起、胴部に 4 単位の方形区画文を沈線で描く。器形と横線文は「一原田式」の、S 字文と胴部の沈線加飾は大木 8 a 式の流儀で、概して〈大木化〉が進んだ上器といえる。報告書（大塚昌彦）では、この長方形・方形の格子目状沈線文は「渋川周辺地域で大木系の影響をうけたものが独自の文様として確立したもの」と見ている。6 と 8 はくびれ部の上半が外反する深鉢で、「く」字に張り出す胴上半に渦巻文モチーフの文様帯が廻る。6 は円文を核に複列の連鎖文を描き、8 は S 字状文を連鎖したもので、共に背に網文をつけた降線と太い沈線を併列し余白部に小渦巻を描きこんでいる。大木 8 a 式であるが、降線の背に網文をつける阿玉台式の技法がみられる。7 は曾利 I 式とされるフリルつきの貼紐加飾を特徴とする上器。橋状把手を対置、素文の口縁に振り紐の突起をついている。

このセットには、大木 8 a 式の組成化と曾利系土器が加わっている点で、在地色濃きカッパ出現期より多様化の傾向が認められる。格子目文など大木流儀の加飾は大木 8 a 式の定着・地方化が進んだ状況を示すと考えられ、「三原田式」としてはより新しい段階の土器群と見たい。この上器群には「中峠式」がない。大木 8 a 式の波及当初には多くの場合、「中峠式」乃至その要素をもつ上器が伴うので、それが後出的な上器であるためか、地域性を示すためか問題があるところだが、地域交流が進んで組成が多様化することを思えば、個々何らかの事情で欠落したものと考えられる。加曾利 E I 式古が地域的に確立される段階では、既存型式の要素を留めた局地的な個性は消化されていく。

この観点から、上記の二つのセットは、向吹張例を当初段階、行幸田例をそれに後続する加曾利 E I 式古の前半段階にあてたい、と考える。大木 8 a 式が渗透・定着する過程から見れば、「一原田式」の成立当初は、カッパを中心とし、既存型式を骨子とする組成に特色があり、大木 8 a 式は S 字文突起など画一的なタイプの上器が外来的な在り方で伴うようである。しかし、その後続期には、地域的な上器と大木 8 a 式との融合が進み、地域相応の交流と相まって組成が多様化されていく。大木流儀の土着化であり、次の加曾利 E I 式古の後半段階に確立される在地土器への準備期ともいえる。

在地土器群——例えば浄法寺タイプ（栃木県小川町・浄法寺遺跡N-21区-1号土壙）や東関東の田螺様渦巻突起・渦文と棒状沈線の横帶文をもつタイプ（石岡市・東大橋原遺跡1次・3号土壙他）——は、人木8a式の働きかけで成立するが、その母胎は各様であるわけで、その準備期は地域の伝統土器が色濃く影響しているのである。

### 3. 「中峠式」と地域交流

人木8a式の受容はそれぞれの土地によって差異があり、浸透の度合いや既存型式の組成の在り方などいわば土地柄を反映した地域個性の強い土器群を生み出した。新型式の成立は、受容の初頭における個性的な上器の簇生を前提に、地域相互の交流に伴い組成が多様化する前半期、その継承と淘汰と共に在地の型式が確立する後半期、の三段階を通じて行われる。その地域とは、栃木・茨城の北半を中心とする北関東及び西奥の群馬・茨城南半と千葉北部を主体とする東関東である。人木8a式がこれらの地域にもたらされた当初、既存の阿玉台式は終末段階にあり、組成の中に勝坂式を客体として宿していたが、唐突で浸透力の強い外来型式の受容により上器づくりの変革が急激に進んだ結果、切り替えた時の混乱やこだわり、ためらいなどを要因として地域色豊かな十器群が生起した。それらは基本的に“合の子”上器であり、既存の組成に人木色を被せたスタイルをとり人木8a式と共に存続した。これらの“合の子”十器のうち、とりわけユニークな存在が、北関東から福島南部（「亜関東圏」と私称）の「湯坂タイプ」、茨城北部の「諏訪タイプ」、東関東の「中峠式」などである。人木色も加味し群馬山間部の在地個性豊かな“カッパ”を中心とする「三原田式」もまた同期の土器としてあげられる。このような現象を受け継いで在地土器群の形成が進む。隣接地域との交流が活性化し、その他の従前の組成に新しいタイプやモチーフが加えられ、次第に関東流域の上器として加曾利E I式が形成されていく。創生のこの時期、各地の上器はそれぞれに多様で個性と清新の気に満ちている。

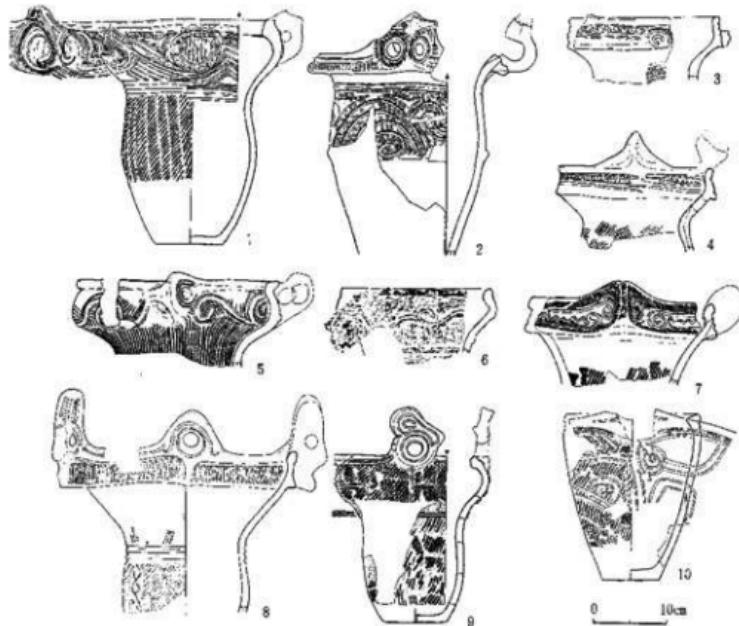
その様相の一側面を、東関東をベースに拡散していった「中峠式」土器群の在り方に見ることができる。この土器群は人木8a式的なもの、阿玉台式的なもの、勝坂式的なものに三人別し得るが、その中の特徴的なものの分布を見ると、およそ北は宇都宮～水戸を結ぶ線、西は「三原田式」と共存して群馬山間域あたりにまで及んでいる。人木8a式の影響圏のうち、北関東を主体に「亜関東圏」はこの時期“華大木圏”といえるほど著しく人木色を強め「中峠式」式的な上器を含まないことに対し、東関東では「中峠式」を組成に加えた“在地圏”とも称すべき関東色が色濃くなっていく。ティピカルな土器の在り方では、亜関東圏では火炎土器及びその系譜に連なる上器が広まるが、東関東では「中峠式」の一群と茨城南部に特徴的な口縁文様に縱列沈線を充填する十器とが広域・定着化する。このような加曾利E I式が成立してい

く括籠期の様相をいくつかの遺跡の土器組成を通じて眺めてみたい。

松戸市子和清水貝塚の発掘資料は「中峰式」土器群の組成を知る上に好適である。

これらのうち、東関東の地域交流を反映していると思われる一群、240号住居址の山十土器を抜き出し第4図に例示する。1・2・3・5は勝坂式的な土器、4・7・8は阿卡台式的な土器、6・9・10は大木8a式的な土器、共に東関東流にデフォルメされた特徴を備えている。前二者にも、口縁部の主体文様は原型式の特徴を保持するものの、体部文様の沈線文や地文の在り方には大木流儀の施文が表れており“合の子”土器としてとらえるべきであろう。

1は貫孔把手と円形文を対置して4単位の口縁文様帯とするもので、陸線で連鎖し余白を二刻文や縱列沈線で充填する。肩部の地文は縦転しの条列施文で大木流儀だが、底部を素文化する勝坂流儀を併用している。このタイプの土器は北関東周縁にまで広まっており、高根沢町・土の原遺跡J D-12（後述）や上三川町・烏田遺跡U-18aなどの土塙出土の土器群では、末期の阿卡台式と共に伴している。3は「中峰式」中の代表的な土器。素文の口唇、直立する口縁、胸部の縦転し地文と底部付近の地文消去などを共通要素とするキャリバー状深鉢で、特徴は貫



第4図 子和清水貝塚・240号住居址の中峰土器（抽出）

孔把手と溝文（乃至はアーチ状文）を対置する4単位構成の口縁文様。横帯文にコの字連鎖の沈刻文を多用する。子和清水貝塚では、勝坂式的な土器を作りセッタ資料の中に多く存在するが、三原田遺跡8-D'38-2Pではカッパと併出する他、東関東一帯に広く存在することから、〈簇生〉段階に成立して以降もしばらくの間存続したものと思われる。6は背割り隆線のS字文を連鎖する人木8a式の要素をもつ上器。S字文は口縁上半に集約されるが、カスガイ様の隆線の両端が渦巻状なる変形も含めて広く盛行する。隆線の背に繩文をつけることが多く、阿玉台式との強い結びつきを示している。東関東の伝統的な土器をベースに成立したきわめて在地色豊かな“合の子”土器といえよう。8はエラの張った阿玉台式独特のキャラリバー状深鉢で4対応する大波状口縁をもつ。口縁横帯文を縦列沈線で充填する施文が特徴的で、勝坂式を作り段階の阿玉台式に発現する在地の装飾文である。北関東では、大田原市・湯坂遺跡T-1-V区上層の土器群（大木8a式古段階）の中にも存在しており、当初から北関東及び東関東の全域に広まつたことが分る。これらの装飾文は東関東の加曾利E I古の後半期に、在地土器の主体的な文様として定着する。石岡市・東大橋原遺跡1次・3号土壙の共件資料はその典型であるが、北関東の同じ段階の土器群にあっては口縁主文様のクランク文の余白部を充填する常套的な装飾文として盛行する。

9は背割り隆線のクランク文・溝文を口縁文様にもつ大木流儀の上器。しかし、対置された板状把手には勝坂式的な加飾が見られる。背割り隆線で表出されるクランク文は、大木8a式に由来するモチーフが関東在地の代表的な土器として確立し、広域的に息の長い存続を示すことは地域的な特性といえよう。

これらの在り方は、「中峠式」が大木色を被せた数種の土器群によって構成される集合体であることと、既存の阿玉台式から関東全城に亘り一・均質化を遂げる加曾利E I式新に至る間の過渡期の土器であることを示している。しかし、“合の子”土器が群集する在り方から、「中峠式」は次の新型式を生み出す進化段階の母胎をなしたのではなく、外来土器を手けて既存土器を切替える過程に生起した多様な土器群の総称と理解しておきたい。前出の1や3などのティピカルな土器だけが「中峠式」なのではなく、それを含む組成全体の呼称なのである。その意味で進化母胎の型式としての“原加曾利E I”ではなく、あくまでも加曾利E I式総体の中で、その括弧内に東関東の土器群としてとらえるべきではなかろうか。

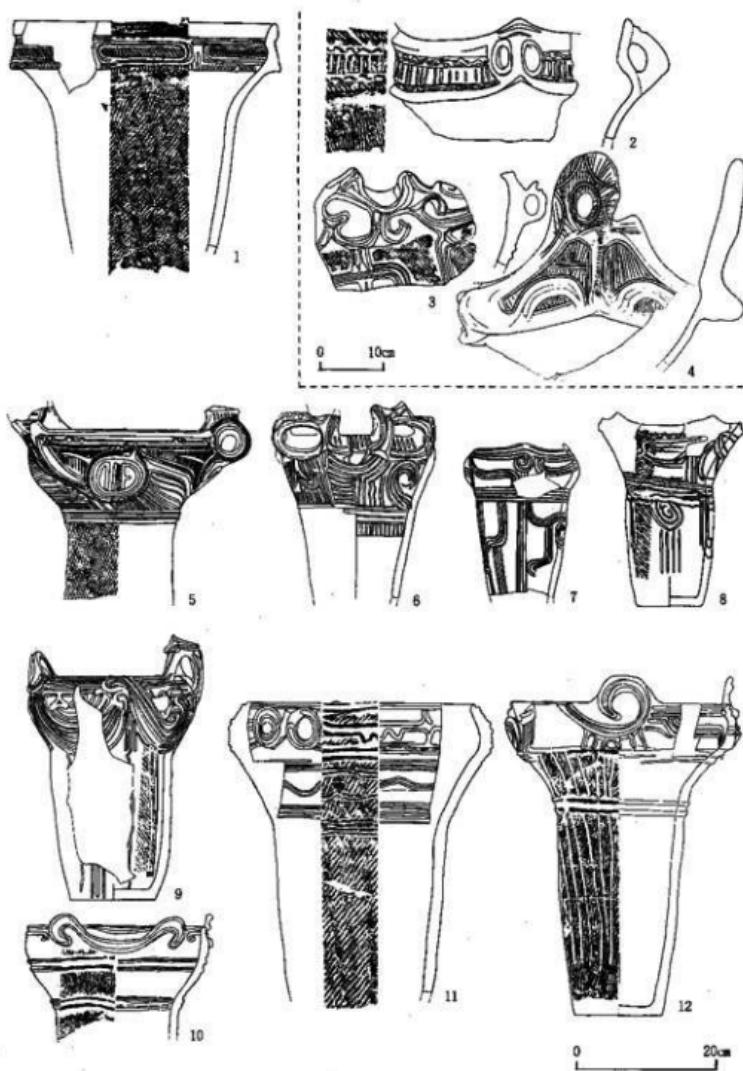
北関東、殊に東北南部と関連深い地域として、栃木・茨城のおよそ宇都宮・水戸を結んだ線の北側と福島南半部とをひとまとまりの地域とし亞関東圏と私称しておく。ここは、繩文中期に北と南からの活発な交流が行われ、関東と東北の文化接触の地として変化に富む文化が展開した。特に中期中・後葉は大木色を強め“準大木陶”的様相を呈する。

しかし、その亞関東圏の南縁は、大木8a式の影響下にありながら「中峠式」との係わりを

持っており、地城色がよく表われている。具体的には、火炎系土器と「中轄式」とが共存していることで、市貝町・添野遺跡34Pや上一川町・島山遺跡土器などの発掘資料がある。ここでは、高根沢町・上の原遺跡JD-12の土器群を見てみる。

この資料は、ローム上面からの深さ195cm・底径265cmの袋状土器から遺物が大量出土したもので、底面付近にはほぼ完形や大破片20固体分が累積しており共伴と認められる。

これらの中から特徴的な土器を抜き出し例示する（第5図）。1・2・4は阿下台式的な土器、5は勝坂式的な土器、3・6～12は大木8a式的な土器である。この土器群は、大木8a式の組成を基本にしているが、先行型式の土器が遺存する点で、前掲の子和清水貝塚240号住居址の土器群と同時期、加曾利E I式古の前半期に位置づけられる。1は口縁文様に横帯文を配し、エラ様に張り出したV字縫線の背に刻線を施すもので阿下台流儀だが、地文は縦転しの条列施文で人木流儀。2は貫孔把手と縦列沈線を配した口縁文様をもつ。横帯文の区画にコの字沈線が用いられており、「中轄式」との関連が察せられる。北関東の終末期阿上台式に類似が多く、上河内村・梨木平遺跡1次-P. 37ではS字文連鎖の大木8a式と併出している。5は貫孔把手と塊状（破損で不詳）を対置し、円形文と三刻文を主文に余白部を彫線で充填、胴部に縦文を施す。胴下半を欠損するが、底部は地文を消去したものと思われる。「中轄式」組成の中の最も特徴的な土器で、前述のように東関東に広まっている。6は火炎系の土器。4対応する鶏頭冠把手、半截竹管で半肉彫様に器面の上下二段に充填施文するが、祖形には稍遠く変形している。大木8a式の組成土器として会津経山でもたらされたもの。西那須野町・櫻沢遺跡P-87十器群では火炎系土器が阿下台式、会津的な大木8a式と併出している。大田原市・湯坂遺跡T-IV-V区土器の土器群では、阿上台式と併出する大木8a式の中に火炎系土器は含まれていない。この二つの在り方から、北関東では、火炎系土器は大木8a式がもたらされた当初ではなく、それに後続する段階で出現するものと理解される。従って、5の土器が火炎系土器と併出するのは、伝播するまでの時間差や5の土器自体の存続の長さなどを考慮しての時間的なずれを見るべきかも知れない。9は「淨法寺タイプ」と呼称している土器。口縁文様に半肉彫的な複弧文を充填、胴部は沈線の懸垂文を配する。中空の把手を対置し口縁・胴部とも4単位の文様構成をとる。火炎系土器を祖形とする北関東十石の土器で、加曾利E I式古の後半期に確立するいわば北関東型の加曾利E I式である。この土器は、次の加曾利E I式新の段階に継続して盛行し、息の長いタイプである。淨法寺タイプが、この土器群の組成として加わっていることは出現期の在り方を示す資料として意義深い。10は背割り降線のS字文を特徴とする大木8a式だが、器面に条縫地文を施す点で北関東的な土器である。人木流儀の地文では、間隔をあけて縫文原体を縦転した条列施文が最も特徴的であり、条縫地文は阿下台式末期から多用されるようになる。勝坂流儀とされる撫糸地文は大木8b式併行段階になって一般化する。



第5図 上の原遺跡・JD-12の中期土器（抽出）

このように地文には、地場的、保存的な傾向があるように思われる。

松戸市・子和清水貝塚と高根沢町・上の原遺跡との例示した土器群の係り合いを、次のように要約できる。

北関東を通じて東関東へ人木8a式が滲透した当初、既存型式に人木色を被せた形の地域個性の強い土器が局地的に生起する。これに後続する時期は、関東スタイルの土器が各地で成立していく。文様の移籍や共用が起り、ティビカルな土器が広域的に普及する。その代表的土器として第4図1・第5図5・第5図3などがある。これらは当初から出現し、加曾利E I式が成立していく挿監期を通じて存続したようだ。この時期“北関東圏”には火炎系土器が広まるが「中峠式」は入っておらず、東関東圏では在地組成に「中峠式」が累加されるが、火炎系土器は入っていない。両地域ともに人木8a式の影響下におかれるが、“北関東圏”で強く人木色が表されるのに対し、東関東圏では在地性が濃く、群馬方面までも含めて交流し、土器組成の多様化が進む。それは人木8a式の繼続期で、人木8a式の新しい段階に対比され、やがて東大橋原遺跡（前述）の上器群、北関東の浄法寺タイプを土体とする土器群、などの大木色を抜け出た加曾利E I式古の関東上着の土器が出現するものと考える。

#### 4. 「搖籃期」の地域的組成

中期中葉、大木8a式の滲透により、北・東関東で生起した地域的な 加曾利E I式搖籃期の上器群の様相をいくつかの既存資料により比較してみたい。同じステージに上らすため、阿玉台式を作出しているセットを選抜した。道構により量の寡多があって組成を充分に把握できない面もあるが、この地域における加曾利E I式が生成されていく時期の在り方を反映しているものと理解して、第6図に資料を示し論を進めるに至る。

1～3は茨城県鹿島町・鐵治台遺跡の土壌出土の資料。1は口縁文様に4単位の横帶文を配し、背に刻み目をもつ貫孔把手を対置する。区画内は縦位の刻線で充填する。素文の直立する口唇と、地文を消去した底部付近が特徴的である。勝坂式的な「中峠式」で、一群の中では最もティビカルな土器。この土器は、「中峠式」の当初に出現し、加曾利E I式古の前半段階を通じて広域的に盛行する。鹿島町の地理的位置からみて早い段階でもたらされたと思われる。2・3は共件資料で、2は貫孔把手と交差刺突による沈線に特徴づけられる「中峠式」。3の阿玉台式は降線背にも縦文を施した終末期の土器で、区画内に縦列沈線を充填する点が東関東流儀である。この土器を作出することから、東関東の南縁では、型式交替の当初段階で「中峠式」を組成にとり入れていることが分る。

4～6は茨城県桜川村・下広岡遺跡の十箇山土の資料。4は阿玉台式で、隆線背に縦文を施し、一部の区画内に縦列沈線を充填するなど終末期の特徴をもつ。5・6も阿玉台式を母胎に



第6図 北・東関東の中期土器

1、鎌治台遺跡SK30 2・3、鎌治台遺跡SK19 4～6、下広岡遺跡SK10

7～9、了和清水貝塚28号住居址 10・11、御城田遺跡SK463 12・13、小町田遺跡23号住居址

成立した土器。5はS字文を4単位に配し器面全体に縄文を施すが、口縁部と胴部とで施文方向を変えている。S字文は背割り降線で、背に縄文がつけられる。S字文は大木8a式を受容した際に一的に普及したらしく、北関東と共に広域的に施文されている。ただ、北関東では口縁突帯にS字文を連鎖するなど大木8a式本来の土器が主流で、背割り沈線に結節を施す阿下台式の施文が混用される程度であるのに比べ、東関東では口唇が外反し、口頸が「く」字様に張り出す器形の上半部にS字文を集約・連鎖する方式をとっており、阿玉台式との“合の子”という印象が強い。6はII縁文様に渦巻文と交差刺突の沈線を配し、余白を斜行沈線で充填する。交互刺突の沈線文と刻線充填文を併用した点で、中峠式の要素をもつ東関東流儀の土器といえよう。この段階で地域的な土器として組成に加わり、広まったもので北関東付近にまで及んでいる。

7~9は千葉県松戸市・子和清水貝塚の住居址出土の資料。掲示されている個体識別が可能な25点のうちから抜き出したものだが、多様な土器を含んでいて、「中峠式」の組成を示すワンセットと思われる。この中には、勝坂式的なもの、阿玉台式及び阿下台式的なもの、大木8a式的なものが含まれるが、S字文を連鎖した阿玉台式的な土器が存在し、5の類例と見られるところから、時期的には阿玉台式の終末期と考えたい。7・8は特に「中峠式」の代表的な存在である。7は貫孔把手を対置した「中峠式」組成のうちで最もティピカルな土器で、1と同じ系譜をなすもの。このタイプの土器が「中峠式」当初から確立され、時間と共に広域化していったのであろう。8は口唇が外反し、口頸が「く」字様に張り出す深鉢。「中峠式」のうちでも代表的な器形である。「く」字縁の上半部にコの字状沈線とS字文を連鎖するもので、阿玉台式と大木8a式との合の子土器として広まった。宇都宮市・御城田遺跡の19号住居址、市貝町・添野遺跡の34号土壙（後述）など栃木中央域でも類例が見られるが、器形は口縁がゆるく外反する深鉢で、所謂キャリバー状をなすものが目立つ。9は円筒状の把手と縦列沈線を充填した横帯文、胴部に燃糸文を施した勝坂式的な土器。もともと勝坂型でない東関東域に、勝坂式が「中峠式」の組成の一部として遺存することは注意される。北関東でも、大木8a式渗透の当初に阿玉台式に宿った形や、かなりデフォルメされた形の勝坂式（栃木県小川町・一輪仲町遺跡・町発掘2次・3号住居址資料）が作出することがあり、北上するほど量、質とも弱くはなるものの、阿玉台式終末期の関東在地の組成としてその存在が認められる。従って、「中峠式」当初に、このように鮮明な勝坂式的な土器が存在することは組成の上でこれが重視され、かつ拘束力をもった位置づけがあったことも考えられる。

10・11は宇都宮市・御城田遺跡の上塙出土の資料。7個体のうちの2点で、条縁地文の阿玉台式、刻み目文を口縁に施した「中峠式」的な土器が伴っている。10は大木8a式的な土器で、口頸がふくらむ深鉢は、〈亞関東圏〉で受容当初から盛行する器形で伝統的なもの。S字文、渦

卷文を連鎖する口縁文様が特徴で、胴部に間隔施文の縄文地文をもつのが通例。この土器は渦巻文を4単位に連鎖するが、口縁くびれ部に波線を貼付、地文に撚糸文を施す、など関東流儀の文様が混用されている。S字文連鎖の文様は大木流儀としては当初から出現するが、東関東圏に拡散するとS字文の系譜の上器は、各地に類例をふやし渦巻文、橢円横帯文などに変形して加曾利E I式古の前半期を通じて存続したらしい。前述の「中峠式」の代表的な土器である勝坂式的なものや阿玉台式的なものに対して、大木8a式的なものの代表的な上器といえる。11は勝坂式的な土器。立体的な把手を対置、刻み目を充填した横帯文と胴部の撚糸文が特徴的で、余白に縦列沈線を充填するなど在地色もみられる。

12・13は前橋市・小町田遺跡の住居址出土の資料で、群馬では加曾利E I式と呼称され、当方でいう加曾利E I式古に対比される。12は降線区画の横帯文の上縁に、交互刺突の沈線を配し、「中峠式」的な要素がみられる。横帯文に描き込んだ渦巻文の加飾は北関東では浅鉢上器に類例が多い。13は勝坂式的な土器。立体的な把手と渦巻文・縦列沈線で充填した横帯文、背に刻み目をもつ降線、胴部の撚糸地文など勝坂流儀の文様と、大木的なS字文とが併用されている。大木8a式を受容し、加曾利E I式古の組成が確立した段階で「中峠式」的な要素を取り込んでいる上器群といえる。

「三原田式」が広まった群馬北西の山間域と南東の平野部とでは「中峠式」の影響度合に差違があって、勝坂式ないし勝坂式的な土器との共伴が認められる時期に限って見れば、前者の地域では「中峠式」的な要素の受容ではなく、後者ではそれが認められる、ということではないか。大木8a式が波及し、既存型式の継続のうちに土器づくりの変化・交替が進む大勢は、群馬の山間域と平野部とを含めて進歩したとみられるが、「三原田式」が当初組成の中に「中峠式」的な土器を含まないのに対し、「三原田式」が進出しない平野部ではその段階で「中峠式」的な土器も受容している。つまり、播磨期の加曾利E I式土器は、前述してきた東関東一帯や〈垂関東圏〉南縁地帯とはほぼ同じ歩調の交流・広域化を遂げていると理解しておきたい。

## 5. 〈垂関東圏〉南縁の様相

〈垂関東圏〉の私説は、北関東の、特に栃木・茨城の北半地域と福島の南半地域とが、縄文時代の関東圏と東北圏の狭間にあって文化交流の上で常に密接な結びつきを示すひとまとまりの地域、とする認識に基いたものである。この地域は単に文化の波が通り抜けるだけでなく、双方の波が交錯する過程で在地的な文化を醸成し、特に中期の土器は地域個性をもった〈準大木櫛〉とでも称すべき様相を呈している。その南縁をおよそ宇都宮一水戸の線において、茨城南部・千葉北部が主体の東関東圏と較べると、前述のようにこの地域は既存型式の伝統に根ざした在地色が濃い、より関東的な土器づくりが行われている。いま、両圏の接するあたりの字



第7図 板木出土の中前期十器

1. ハットヤ遺跡土壙 2. 島田遺跡土壙 3～5. 稲野遺跡34号土壙

6～8. 御城卫遺跡SK27 9. 竹下遺跡SK107 10・11. 竹下遺跡SK129

都宮付近で、いくつかの遺跡を取り上げ阿玉台式末期の土器群の様相を眺めると、ここには大木を基調としながらも東関東圏に関連する土器を組成にもっており、広域的な影響力とその交流ぶりとが窺われる。これらの係わりに注意しながら、第7図に掲げた土器群について〈東関東圏〉南縁の地域性を見てみたい。

1は氏家町・ハットヤ遺跡、2は上三川町・島山遺跡の単体資料で、共に阿玉台式との伴出関係は不詳であるが勝坂式的な特徴をもつ土器であり、時期的には阿玉台式末期に位置付けてよからう。1は幅広の素文帯をもち口縁が外反する深鉢で、方体状と三角状の把手を対置し、くびれ部に貫孔把手を対置する。胸部に渦巻文を主とする沈線加飾をし、胴下部は施文後に器面を抉って無文化している。2は円筒状の立体把手と貫孔把手を対置し、口縁文様に背割り降線のS字文を4単位に配するもので、隆線の背に刻み目をもつ。胸部に撚糸地文を施し渦巻文を主とする沈線加飾をし、底部付近は磨消して無文化している。この2個体は、把手や刻み目文を伴う加飾、撚糸地文や無文化した底部など、勝坂式の特徴を色濃く保っているが、頸部のくびれる深鉢器形や渦巻文による沈線加飾などは大木8a式の要素であり、“合の子”土器の形態で具現されている。それは主に、勝坂式が阿玉台式末期に取り入れられた時間的な近さが要因であるが、この段階では、十器組成の中に勝坂式を離いた十器がなぜ必要な存在であったか。

3～5は市貝町・添野遺跡の土壤共伴の資料。8個体のうちの3点で、終末段階の阿玉台式、多孔の中空把手と背割り降線をもつ大木8a式、条縁地文をもつ外来系と思われる土器、などが組成である。4対応する扇状口縁をもつ阿玉台式の深鉢は、キャタピラ文加飾がなく、全面を繩文施文した終末段階の土器で、横帯文の下限を交互刺突の沈線で縁どるなど「中峠式」の要素を付加している。3は人木8a式的な土器。4対応の貫孔把手のうち1つが直立、沈線で口縁横帯文を表出するが刻線加飾はない。胸部はベタ転しの繩文で、底部に無文部をもつ。合の子的な土器である。4は「中峠式」的な土器。直立する口唇に繩文、「く」字様に張り出す口縁上半に、背割りのアーチ状凸起を4対応させ、口縁横帯文に2列の交互刺突沈線を充填する。胸部はベタ転しの繩文で、底部に無文部をもつ。5は口縁部がひらく深鉢で、くびれ部から口唇までの器面に地文がない。2本の沈線を廻らせて口唇素文帯を区画、口類に4単位のS字文を対置する。S字文は短い弧線でつなぎ、全体として背割りの波線が素文の頸部を一周する。波線の上側余白の一部に縦列沈線を充填。胸部はベタ転しの繩文で、底部に無文部をもつ。「中峠式」のうち、S字文連鎖のタイプだが、縦列沈線の充填は、前出の上の原遺跡第5図10の施文と同様であり、人木流儀のS字文と在地的な刻線加飾が併用された土器といえる。これら3個体は、大木8a式の影響下に成立したセットであるが、東関東の広域的な交流が進む段階の土器を組成にもっており、“隼人木圏”的北関東とは異り南縁地域の様相が特徴的に表われて

いる。

6～8は宇都宮市・御城田遺跡の上塙共作の資料。阿玉台式を伴出していない。6は「中峠式」。中の代表的な土器。貫孔把手と円形文を1単位に対置し、口縁横帯文に3本の交互刺突沈線を配する。無文の口縁、「く」字屈折の口類をもつ深鉢、降線に刻み目加飾があり、勝坂式的な要素をもつ。胴部は条線地文で、当地は阿玉台式末期から出現する施文である。7は1単位にクランク文を配する深鉢で大木8a式の新しい段階に盛行する。8は大木8a式。口縁が直線的に外反する深鉢で、S字風の貫孔把手を1つもち、胴部は結節沈線による懸垂文・屈折文を施す。地文はベタ網文だが底部を無文化している。個体としては古いタイプだが、7との伴出により、より新しい段階まで存続した土器と見るべきであろう。

この認識に立てば、〈亜関東圏〉では大木8a式の新しい段階でも「中峠式」は作わないが、その南縁地域ではそれを取り込んでいることになる。大木8a式の證透当初に生起した「中峠式」よりも時期的に新しくなるわけで、この時期が東関東圏における交流の時間経過を示している。同じ御城田遺跡のSK217共作資料9個体では、大木8a式、終末期阿卡台式、勝坂式的な土器と共に「中峠式」が組成化されているし、SK662共作資料17個体では、それより一段階古い湯坂タイプ2個体を含む大木8a式、終末期阿玉台式の土器と共に、刻み目文や交互刺突の沈線加飾をもつ勝坂式的な土器があり「中峠式」の仲間と口される。これらの在り方からも「中峠式」の存続には加曾利E1式古の段階を通じての時間経過が考えられねばならないが、この時期の土器群に、当初から組成化される勝坂式的な土器の存在意義を見つめる必要があるようである。

〈東関東圏〉の既存型式の組成で、勝坂式は外来的な土器である。ここでは、勝坂式は阿卡台式に寄生するか、大木8a式と共生するかで、勝坂式本体として出現することは少い。いわば“合の子”土器として組成化される。「中峠式」の中の勝坂式的な土器もまた同様の表われ方をしたものと考える。“合の子”的であるが故に土器の顔つきは一様ではないし、量も多くはないが、この仲間の土器は加曾利E1式の撫養期を通じて存続する。勝坂式の余命的な存続が該期土器群にあって不可欠な因子となっているわけで、土器づくりの上に勝坂式のもつ何かが強烈なインパクトを与えているのである。

9～10は宇都宮市・竹下遺跡の上塙出土の資料。9は無文の口縁と「く」字屈折の口類をもつ深鉢。渦巻文を逆鎖し、口縁無文帶を交互刺突沈線で区画、口縁文様の余白に縱列沈線を充填している。阿玉台式、大木8a式が伴出。「中峠式」のひとつで、前出の下広岡遺跡例と同類の土器。東関東流儀の土器である。10・11は上塙共作の資料。阿卡台式、大木8a式を組成にもっている。背に結節沈線を施すS字突帶をもつ土器や動物把手（前川）をもつ土器など、〈亜関東圏〉の大木8a式古手の組成である。10は終末的な阿卡台式で、三叉文を土文にする勝坂

式の要素をもつ土器（図は個体の胸部か）。湯坂タイプ出現期のワンセットだが、「中峠式」的な土器が伴出していない。11も阿玉台式で、隆線上の施文や結節沈線を欠き、ベタ転しの縄文地文をもつなど終末的な特徴をもつ。口縁文様の波状文はS字文連鎖の文様と同類であろうが背割りがない。このセットは、同じ宇都宮の前出の御城山遺跡SK662のセットと同時期であり、同じ湯坂タイプを伴う大木8a式占手の土器群であるが、「中峠式」が作わない点で“革大木圈”の在り方を示している。

以上の、第7図に掲げた〈亜関東圏〉南縁の各土器群から括籠期・加曾利E1式の様相を次のように要約できる。

この地域の土器組成は当然ながら“革大木圈”的な在り方を示しているが、東関東圏との係わりで、大木8a式渗透の当初段階から「中峠式」的な土器を取り込んでいる。その要素が定着するのは、派野遺跡3~5や御城田遺跡6~8などを指標とする大木8a式の後半段階で、いわば東関東圏で当初段階の上器の交流・広域化が進む時期にあたる。従って、その組成は外来系、在地系の混在する多様な意味をもつことになる。土器のタイプを「的」の用語で表現したのは、それぞれが折衷形態をとる“合の子”上器であるためだが、それは外来土器が在地化していくプロセスに他ならない。竹下遺跡9に特徴的な継列沈線の加飾が、以降の北関東一帯で加曾利E1式のメルクマール化するのはその好例である。

外来土器として特異な命脈を保つのが、ハットヤ遺跡1や島山遺跡2などの「中峠式」内の勝坂式の特徴を強くもつ土器である。個性的な顔つきであるだけに目立った存在となるが、量的には少いし、勝坂式の“余命”段階に位置づけされ、その盛行域から見ても遠く外周圏にあたる。このような在り方で勝坂系譜の土器が、暫くの間に顕在化することは奇異の感が強い。竹下遺跡10・11の段階では阿玉台式の寄生的要素として出現し、「中峠式」に組成化されるところの広域化に伴って継続するわけである。

このように系譜の異なる多様な土器が組成化された要因は、大木8a式の渗透であった。大木8a式の受容を軸機として各地の土器交替が始まつた。その時期は、北関東、東関東でほとんど一樣であったとしても、受容した地域に差違があり、それが様々なタイプの土器を生み出して行った。総じていえば、大木8a式のインパクト抜きでは生起し得ない“合の子”土器群の出現であり、それらの交流・取り込みの様相を看取できる点で、〈亜関東圏〉南縁は加曾利E1式の成立への示唆に富むフィールドであるといえまいか。

## 6. 大木圈の『遠交近攻』

中期中葉、大木8a式の唐突で強盛な浸透により関東周縁地域の型式交替が急速に進展する。既存の阿玉台式が終焉を迎える暫しの間、大木8a式はこれと共存し、個性的で在地色の強い

新たな土器群を各地で生起させた。その新たな土器群は、北関東平野部から東関東にかけては既存の阿卡台式、北関東西部の山間域では勝坂式を母胎として大木8a式の要素が客体的に合成された折衷土器が人勢を占めるが、出現当初の段階でそれぞれの土地に根差した独自の文様モチーフが併用されることになる。大木8a式の影響下におかれたこれらの地域のうち、土器組成における互恵的な交流・結びつきの強さからみて二つの地域に大別できる。一つは、福島南部と結びつく栃木・茨城の北部をひとまとまりの地域として仮称する〈亜関東圏〉であり、一つは茨城南半から千葉北部に及ぶ東関東圏である。

いま、大木8a式との係わり度合いから『通交近攻』の故事になぞらえるなら、〈亜関東圏〉は中期中葉から後葉を通じて人木色が卓越する〈準人木〉地域であり、当初段階の以降も火炎系土器の新米やその土着生成による浄法寺タイプなどが発現する「近攻」の地であるのに対し、東関東圏は当初段階から「中峰式」などに代表される在地色の濃い土器群が簇生・展開する関東縁辺の地域であり、その後も相互交流を強めながら田螺形の渦巻突起や併列沈線で口縁加飾を行う東関東流儀の土器をつくり出していく、いわば「遠交」の地でもある。

関東スタイルを確立し、汎関東的に一的な要素をもって出現する加曾利E1式は、大別するところの加曾利E1式（新）であり、大木8b式に対比され、群馬で呼ぶ加曾利E2式である。その前段階、汎関東的な所謂加曾利E1式出現の前提となる土器群=加曾利E1式（古）は地域個性に彩られ、互恵的な交流を作りながら生起展開してきた。群馬で加曾利E1と呼ばれ、大木8a式に対比されるこの土器群は、細別すれば、当初段階・継続・在地化のおよそ三つの段階を経て展開していく。その当初段階、いわば〈搖籃期〉の加曾利E1式の何と個性豊かで清新創造の気に溢れていることか。東関東圏が〈亜関東圏〉に接する栃木中央域では、当初段階からその継続期にかけての活発な交流を跡づける各タイプの土器群が隨所に見られる。小緒のまとめに代えて、それらのいくつかを写真で例示し、往時の様相を少し眺めてみたい。

1・2は御城田遺跡SK217の共伴資料。この土器出土の土器個体には、キャタビラ文がつかない終末段階の阿玉台式、隆線の背に刻み日文をもつ貫孔突起の勝坂式的な土器などが含まれており、当初段階に位置づけできる。1は「く」字状に屈曲する口頸上半部に文様が集約される。屈曲部に4対応する突起があり、背に刻み日文を施した2本の隆線でつなぐ。口縁に沿って「コの字」状の隆線が廻る。器形、文様要素から「中峰式」な土器である。2は胴長の深鉢で、口頸上半部に文様が集約され、胴部は間隔をあけた縱軸しの網文を施すが、底部附近を磨消し素文化している。口縁横帶文は太い沈線で彫刻的に方形区画文と渦巻文とを配列し、余白部を縦列沈線で充填しているが不規則である。外反する素文の11片、その直下の交互刺突文による波線など、「中峰式」的な土器だが、隆線の刻み日文、胴部の地文の在り方など勝坂式と大木8a式の折衷的な特徴を備えている。



写-1 「搖籃期」の中期上器

- 1・2. 御城山遺跡、SK. 217 3. 須治台遺跡、SK. 30  
4. 高尾神遺跡、造様 5. 鳥川遺跡、U-18a 七段  
6. 深野遺跡、34号土坑

3は鹿島町・鍛冶台遺跡S K30(前出)の出土。「コの字」状波線、降線の刻み目で人念に加飾し、端正なキャリバー器形を呈する、如何にも“本場”らしい「中峠式」である。

4は宇都宮市・高尾神遺跡の発掘資料。直線的に外反する深鉢に、4単位の棒状突帯を配し、その連接部に円孔突帯を配する。隆線に背割り沈線を施し、背の全面に縄文をつける。胴部の縄文は継転しの間隔施文。「中峠式」的要素をもたない阿玉台式末葉の上器である。伴出土器は明らかにされていないが、人木8a式との折衷上器であり、当初段階に位置づけできるとみる。

5は上二川町・島田遺跡U-18a十坑の出土。円形文を5単位に配し、斜行する隆線で連鎖し、余白部を縦列沈線で充填する。外反する素文の口輪、その下位を廻る2本の降線は交互に「コの字」状波文が入れ違うよう配置されている。隆線上の背割り沈線や胴部の間隔施文の縄文など、大木流儀の加飾が見られる。勝坂式的な「中峠式」のひとつで、東関東から北関東へかけて広域的に分布する。終末段階の阿卡台式2点が伴出、当初段階に位置づけされることを示す。

6は市貝町・添野遺跡土壇34から8個体の共伴資料(前出)の中の1つ。滑らかなキャリバー器形の「く」字状屈折の口類上半に4単位構成の横帯文を配する。半円状の弧文と半円を2つ連鎖した波文を1対ずつ対置し、余白部に梢円区画文を描く。区画文の上縁には交互刺突による波文、下縁は刻み目をつけた隆線を廻し、「中峠式」の要素が見現される。口縁は素文ではなく全面に縄文を施し、隆線は背割り沈線、胴部にも底部附近の無文部を除き縄文を施す。阿玉台式末期の上器を母胎に諸要素を合体させたもので、東関東流儀が特徴的にうかがわれる当初段階の上器である。

ここに例示した宇都宮市の御城田遺跡、高尾神遺跡、市貝町の添野遺跡、上二川町の島田遺跡は〈非関東圏〉の南縁で東関東圏に接する地域である。これらに見られる当初段階における「中峠式」的な要素の表われは、東関東圏の該期上器群の多様化と広域性とを特徴づけるものであるが、〈非関東圏〉における「中峠式」的な要素の稀薄さ及び人木要素の雜承土着化の傾向などを見較べるとき、そこに際立った地域差を看取できる。人木8a式の受容を契機として展開した上器型式の交替は、北関東に湯坂タイプ、諏訪タイプ、その西奥に一原山式、東関東に「中峠式」に総括される各タイプを簇生させ、局地的だが豊かな地域個性をもつ上器群が当初段階を飾った。その地域差が「摺築期」加曾利E1式の眼目であった。それは地域集團の保守性と伝統固執の傾向を暗示するものだが、瞬くうちに広域化が進捗することを見るとき、中期社会の汎化、齊一化へ向う壮大な流れとエネルギーを感じざるを得ない。個性の時代から齊一化の時代へ、活力にみちたこのような地域紹介を、平板な画一的な組成へと動かし、「汎関東」化をもたらしたもののは何だったのか。上器の世界の不思議さを改めて感じ入るばかりである。

(掲載した図版の出典は当該遺跡の発掘調査報告書(文本の参考文献)に掲った。文中の銘記を省かせて頂いた。また、文献執筆は頭記の方のみを記したので併せて御了承を得たい)

### おわりに

小稿を草するにあたり、次の方々に御教示を得た。特に、島田遺跡の資料は報告書準備中にもかかわらず上三川町当局の御配慮を得た。銘記してお礼申し上げる。(敬称略)

秋元陽光 上野秀一 風間和秀 瓦吹堅 今平利幸 後藤信祐 桜岡正信 芹沢清八 橋本久雄 森下松寿 市貝町教委 宇都宮市教委 鹿島町教委 上三川町教委 日本歴史研究所

(昭和56年~58年度勤務 現 県立宇都宮商業高校)

### 参考文献

- 青木 健二 1981「上の原遺跡」日本歴史研究所  
赤石澤 亮 1989「竹下遺跡Ⅰ」宇都宮市教育委員会  
赤山 容造 1976「三原田遺跡」群馬県企画局  
赤山 容造 1980「三原田遺跡 第1巻」群馬県企画局  
赤山 容造 1990「三原田遺跡 第2巻」群馬県企画局  
海老沢 稔 1978「右岡市東大橋原遺跡」(第1次)石岡市教育委員会  
海老原郁雄 1979「湯坂遺跡」大田原市教育委員会  
海老原郁雄 1986「梨木平遺跡」(第1次~4次総括)上河内村教育委員会  
海老原郁雄・鍋木理広 1988「三輪仲町遺跡」(第1・2次)小川町教育委員会  
大塚 昌彦 1987「行幸田山遺跡」渋川市教育委員会  
風間 和秀 1990「鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅵ(鍛冶台遺跡)」  
茨城県鹿島町遺跡保護調査会  
関根 孝夫 1978「子和清水貝塚 遺物図版編1」松戸市教育委員会  
芹澤 清八 1986「御城田」栃木県教育委員会  
高根 信和 1981「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ(下広岡遺跡)」  
埼玉県教育財団  
高橋 良治 1976「中崎遺跡発掘調査概要 他」下総考古学6 下総考古学研究会  
堀 静夫 1974「添野遺跡の研究」下野古代文化研究会  
羽鳥 政彦 1987「富士見遺跡群(向吹張遺跡 他)」富士見村教育委員会  
藤巻 幸男 1984「小町田遺跡」栃木県埋蔵文化財調査事業団  
森下 松寿 1979「塙釜遺跡発掘調査概報」茨城県鹿島町遺跡保護調査会

---

## 研究紀要 第1号

発 行 平成4年3月31日

編集・発行 財団法人 栃木県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

〒329-04  
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙 474  
TEL 0285-44-8441  
FAX 0285-44-8445

印 刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷

---